

# カルチャー WEST

祭りの熱気は異文化と交わるほどに増してゆく。シャブリエとドビュッシーの曲では、フランス一流のエスプリとスペインの情熱的なリズムがスパイシーに絡む。ハンガリーのリストとルーマニアのエネスコの曲はロマ(ジプシー)の舞曲の装いで苛烈に疾走。上野耕平のアルトサクソフォンが華のある中低音で挑発し、艶めいた音をオーケストラから引き出した。

井上道義が旗を振り、オーケストラが踊りに踊る。九州交響楽団の第359回定期演奏会(6月22日、福岡シンフォニーホール)。初夏を彩る博多祇園山笠の、心憎い前夜祭となった。

## 「評」九州交響楽団

## 祭りの熱気 奏でたラプソディー

「ゴジラ」のあのテーマが象徴する伊福部サウンドの核は、異文化共生、祭り、そしてアマチュアイズム。人間本来の素朴な



指揮台を降り、楽員たちの「祭り」に加わる井上道義=九州交響楽団提供

いよいよ本丸、伊福部昭の登場だ。「ゴジラ」のあのテーマが象徴する伊福部サウンドの核は、異文化共生、祭り、そしてアマチュアイズム。人間本来の素朴な感情を呼びさます、命の雄叫びとしての真の熱狂だ。北海道に生まれ、アイヌ文化に親しみ、林務官として自然の懐に暮らす。そんな暮らしに培われた感性を総動員し、21歳の時に独学で書いたのが「日本狂詩曲」。79歳のピアノ奏者、菅沼準二の鈍色にくすんだ音色が、喧嘩にまぎれてむつみ合う男女のささやきを彷彿させた。神興を率いる指揮者も、ついに自ら神興の上に立つ。「いくせ!」のかげ声とともに外山雄三「管弦楽のためのラプソディー」へ。初演は1960年、NHK交響楽団。日本各地の祭りの音楽を自在にパラフレース。和太鼓のリズムがはじけ、ウクライナ人のクラリネット奏者、タラス・デムチシンが喧嘩囃子にやんちゃに跳ねる。奏者全員が前のめりのクライマックス。素直な感情が音になる。祭りの心を知る九響で聴けてよかった。(編集委員・吉田純子)

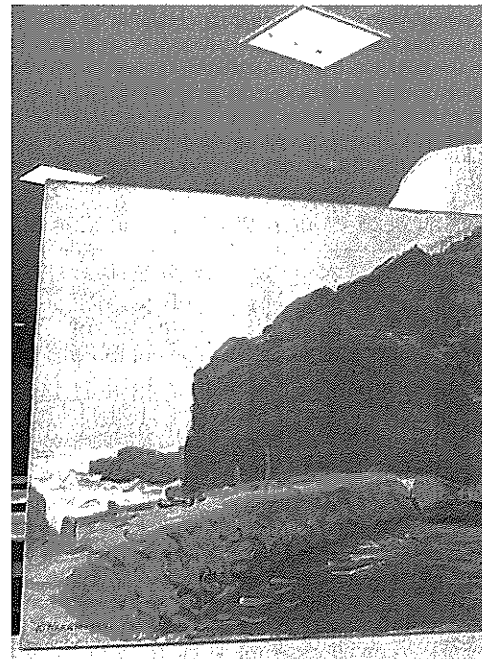


書店に並ぶ漫画「海の民宗像」=宗像市の明屋書店、沖ノ島関連書籍の特設コーナー

明屋書店くりえいと宗像店で、設展示されている。従軍画家を委嘱されるなど海

## 第359回定期演奏会

## 上陸



中村研一が描いた「日本海沖ノ島」=宗像市の海の道むなかた館

朝日新聞社の  
お知らせ

「にんげんだもの 相田みつを展」30日回まで山口県下関市の下関市立美術館(083・245・4131)。命の尊さをテーマに、独自の書風で心に響く作品

を発表し続けた、書家・詩人の相田みつを(1924~1991)。初期から晩年までの代表作と愛用の品など約120点を展示し、相田みつをの創作の全体像に迫

ります。午前9時30分~館は午後4時30分まで。だし17日(週)は開館。一般生800円、18歳以下と70歳